

幼児期の言葉による伝え合い —話し合い活動の実際—

河野 共 芳 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]

武田あさ子 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]

政野 幸 恵 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]

Verbal communication in early childhood: Actual discussion activities

KAWANO Tomoka, TAKEDA Asako and MASANO Sachie

キーワード：子ども、言葉、話し合い、友達

1. はじめに

1.1. 幼稚園教育要領における言葉による伝え合いについて

幼稚園教育要領の中には、「言語活動の充実」として、「言語に関する能力の発達と思考力等の発達が関連していることを踏まえ、幼稚園全体を通して、幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること。」とある。また、「見通しや振り返りの工夫」として、「幼児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう、幼児の実態を踏まえながら、教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること。」と示されている。活動を楽しみ、楽しかったことを振り返ることで、次の活動への期待や意欲をもち、どのように進めていくか見通しをもって、子どもたちは主体的に遊びを進めていくことができる。

また、平成30年度に幼稚園教育要領（文部科学省、2018）が改訂され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。この中には「言葉による伝え合い」について示されており、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」と示されている。

こうしたことから、幼児期に言葉を使って周りの人たちと伝え合うことは、人間関係を育む上で大切な経験であると考えられる。

1.2. 本園について

本園の教育目標は、「いっぱい遊び いっぱい創り 豊かな感性と心情を育む」とし、1年間を5つの期に分け保育を行っている。子どもたちが主体的に活動し、更にとどのようにして進めたらよいかを考え、工夫して遊びを進めていくことを大切にしている。その中で、自分の考えや思いを言葉で表現することや友達と意見を出し合い工夫していく場面も多く見られる。

2. 内容

本報告では、本園での言葉による伝え合いの場を、降園活動などのクラス全体での伝え合いや話し合いの場面と、好きな遊びの中での話し合いの場面に分けて、子どもたちの実際のやりとりや教師の関わり方についてまとめた。その際、自分の思いを言葉で伝えることと、友達の思いや言葉を受け入れること、そして、話し合いのテーマを共有することが、話し合いを進めていく上で、ポイントとなると考えた。そこで「伝える」「受け入れる」「共有する」の3つの視点から事例を考察し、まとめることとした。

3. 降園活動での振り返り

3.1 本園の指導計画における振り返り・見通しについて

本園では、遊びを継続させ広げていくために、子どもたちが遊びに見通しをもって取り組むことができるようにしたり、その日の遊びを振り返って改善する点はないか考えたりすることを大切にしている。降園活動などで全体の場で共有する時間の他、好きな遊びの場面においても、困ったときなどに、遊んでいる子どもたちで集まって、問題について考える場を設けることもある。また、片付けの際にも、翌日へつながるように意識している。そうしたことは、各学年の指導計画の中にも、それぞれの期における、振り返りや見通しの視点から教師の援助について記載している。

3.2 降園活動での伝え合いについて

降園活動では、子どもたちが楽しく活動できるよう歌や絵本の読み聞かせなどを行う他、その日の遊びについて紹介するようにしている。年少児や年中児のⅠ期（4・5月頃）は、遊びの紹介よりも、新しい友達の顔と名前を覚えられるように、名前当てクイズや自己紹介などを行うことが多い。遊びの中で紹介したいものがあれば、教師が「今日は、こんなことがあったよ。」と子どもに紹介している。年長児になると、毎日4人ずつの当番の子どもたちが、全員の前に立ち、手遊び歌などをした後で、一人ずつその日楽しかったことを発表する場を設けている。「〇〇ちゃんと、□□をしたのが楽しかったです。」というように、相手に伝わりやすく発表できるよう、教師が隣で足りない言葉を補いながら進めている。

こうしたクラス全体での降園活動を通し、友達に自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いて受け入れたりする経験を重ね、友達に対する共感や、一つの遊びに対して思いを共有できると考える。

3.3 降園活動における話し合い活動「お化け屋敷」（年長児9月）

3.2で述べたように、降園活動でその日の遊びを振り返っていく中で、当番の発表以外でも、その日の遊びを紹介することがある。その中で、楽しかったことに加え、困ったことなども尋ねることにより、問題を共有できる場を設けるようにした。

表1 降園活動における話し合い活動「お化け屋敷」の実際

- 当番の子どもが、楽しかったことを発表した。
- A児「お化け屋敷が楽しかったです。」
子ども「行った行った！」
教師「たくさんお客さんきていたね。どこが楽しかった？」
- B児「最後にCくんがバーンって出てくる場所。」
D児「お化けが『わあ！』っていうところ。」
教師「おもしろかったよね。じゃあ、困ったことはなかった？」
- E児「お客さんの手が当たった。」
子ども「僕も当たった。」
子ども「私も。」
- F児「出口から入るお客さんがいた。」
G児「お化けが多くてぶつかった。」
教師「先生も思った。お客さんがどんどん入って行っちゃうから、中の人にとって多くなっていたし、お客さんがお化けのほうに来ちゃってなかなか進んでなかったし、出口から入っちゃうお客さんいたよね。明日はどうしようか。」
- F児「1人ずつ入ったらいいんじゃない？」
教師「1人ずつ入ったら混雑しないかもね。どうやったら1人ずつ入ってくれるかな。」
- E児「入口で『どうぞ』ってしたらいいんじゃない？」
教師「確かに！入口に案内の人がいたらいいね。じゃあ明日はそうしてみようか。」
- 翌日、入り口に立って案内する子どもが現れ、お化け屋敷が始まった。

【考察】

「伝える」…このときは、教師の「困ったことはないか。」との問いに対し、自分が感じて問題点について言葉にして伝える子どもたちがいた。更に「どうしたらよいか。」という教師の問いに対し、客が1人ずつ入り、そのために係を配置するという考えが出て来た。

「受け入れる」…自分から問題点を発表しない子どもたちも、友達の発言を聞くことで、自分のお化け屋敷に行った経験を振り返り、同じ経験をしたと伝えたり、静かに友達の話を聞いたりしていた。

「共有する」…問題点を言葉にすることで、問題点を全員で共有することができた。問題点を共有した上で、改善策を話し合い、教師がその考えを全員で共有して降園活動を終わると、翌日にはその考えを覚えていて、前日に話し合った内容でお化け屋敷を進めていた。

教師が司会者として、子どもたちの言葉を引き出すことで、一つのテーマに対して問題点を振り返り、改善点を話し合うことができると考える。

4. 好きな遊びの場面における話し合い活動

4.1 事例「だって触ってない！」(年中児5月)

保育室の中で、小さな積み木で遊んでいたA児とB児は、箱に入った積み木を床に広げ、その積み木を使ってどこまで高く積み木を積み上げられるか挑戦していた。高く積み上げられたと喜んでいるA児とB児の近くへ、恐竜ごっこをしていたC児とD児がやってきて、床にあった積み木をつかんで走り去ろうとした。B児は怒ってC児から積み木を取り返そうとするが、C児も譲らずに積み木の取り合いになった。

表2 事例「だって触ってない！」の実際

- B児が話しかけるが、そのまま立ち去ろうとするC児とD児。
教師「ちょっと待って。Bくんが僕たち使ってるって言ってるよ。」
C児「え？だって(積み木を)触ってないでしょ。」
- B児とD児が積み木の引っ張り合いをしていた。
教師「待って待って！Bくんたちが使っていたんだって。1回離して話をしよう。」
C児「僕たちはここに置いてあったのを使おうとしたんだよ。」
B児「なんで？僕たちがつくるために使ってたんだよ。」
教師「よく見て。この積み木を使って、上に積み上げて遊んでいたんだよ。Bくんたちは、まだ使おうとしてたんだって。」
C児「だって使おうとしたの知らなかったし。」
教師「あんなに勢いよくきて、ぱっと積み木だけ取って、走り去ろうとしたら、どんなことして遊んでるのか分かるはずないよ～。Dくんも、ぱっと取るんじゃないって、使ってないかな？って確かめてみないと。」
- C児とD児は、教師の話を聞いているが、早く遊びに行きたい様子であった。
教師「次からは、よく確かめてね。」
C児・D児「はい。」
- A児・B児は積み木の続きをして、C児とD児は別のところで遊び始めた。

【考察】

「伝える」…B児とC児は、「自分が使っていたんだ。」「使っているのは分からなかった。」と、自分の思いを言葉で伝えた。

「受け入れる」…友達の言葉を受け入れることは難しい様子が見られた。教師が子どもの代わりに状況や子どもの言葉を伝えると、教師の話は聞くことができた。

「共有する」…教師が話をする間、問題意識を共有できていたため、B児とC児はその場で話をきくことができた。

子ども同士で友達の言葉を聞いて受け入れることが難しい場合には、教師が間に入ることで、友達の言葉を聞いて受け入れることができるため、こうした経験を重ねながら、少しずつ自分たちで伝え合えるようになっていくと考える。

4.2 事例「このカップは私の！」(年長児4月)

色水遊びをしていたA児とB児。A児が、テーブルに1つのカップを置いたまま、別のカップを取りにいった。戻ってくると、B児がテーブルに置いていたカップを使っていて、カップを巡って表3のようにやりとりした。

【考察】

「伝える」…それぞれ自分なりの主張があり、それを言葉で伝えた。教師はそれぞれの思いを伝え合う場を設けた上で、どうしたら嫌な思いをしなかったのか、という視点で再度問いかけた。すると、こんな風に言ってほしかった、という思いを伝えることができた。

「受け入れる」…こんな風に言ってほしかった、という言葉は互いに納得できるものであったため、その後はカップに執着することなく、遊びを進めることができた。

「共有する」…相手を責めるだけではなく、解決策を考えようと提案する教師の思いを共有することで、前向きに話し合いを進めることができた。

自分の主張を繰り返すだけの際は、教師が間に入り、「何が悪かったか」ではなく「どうしたらよかったか」という新たな視点を問いかけることで、友達の言葉を素直に聞いて受け入れることができるようになる。と考える。

表3 事例「このカップは私の！」の実際

- A児とB児がそれぞれ、テーブルに置いていたカップを、これは自分のカップであると主張していた。
教師「Aちゃん、どうしたの？」
A児「私が先に大きなカップを持ってきて置いていたのに勝手に取られた。」
教師「Aちゃんはそう言っているけど、Bちゃんはどうしたの？」
B児「私もカップを置いていた。そこにあつたから私の。」
- A児もB児も自分の考えを主張するばかりで、「私の」というやりとりが続いた。
教師「じゃあAちゃんは、どうしてほしかった？何て言ってほしかった？」
A児「使っていい？って言ってほしかった。」
教師「Aちゃんは、使っていいって聞いてほしかったんだって。そうだよね。使っていい？って言ってくれたらよかったね。」
- B児が頷く。
教師「Bちゃんは、なんて言ってほしかった？」
B児「使わないでって言ってほしかった。」
教師「そっか。これ私が使っているから使わないでって言ってくれたらよかったね。」
- A児が頷く。
教師「お互い、そんな風に言えたらよかったね。じゃあ、このカップどうしようか。」
- その後、互いにカップを譲り合い、それぞれ色水づくりを再開した。

4.3 事例「お化けはどうする？」(年長児9月)

お化け屋敷をつくりたいと、子どもたちが集まってつくり始めた。段ボールを重ねて壁をつくり、黒いカラーポリ袋を被せて屋根にした。中には紙にかいたお化けを貼ったり、自分たちがお化けとなって脅かしたりしていた。それぞれの子どもが自分のやりたい役をしていると、脅かすお化けの役をやりたい子どもが多くなってしまっていた。

表4 事例「お化けはどうする？」の実際

- 朝の支度を終えてしばらくすると、お化け屋敷をしていた子どもたち18人ほどが丸くなって話をしていた。
教師「どうしたの？」
A児「お化けが多かったから。お化けを減らすの。」
教師「そうだね。お化けが多すぎてぶつかっちゃっていたね。でもみんなお化けやりたいもんね。そういえば、入口にも案内が立つって言うていたけど誰がするの？」
B児「僕やる。」
C児「お化けを交替したらいいんじゃない？5人ずつ」
D児「そうしよう。」
教師「そっか。お化けを交替でして、お化けをしない人が入口とか他の仕事をして、また交替してお化けをすればいいのか。お化けじゃない仕事は他に何がある？」
C児「どうぞってする人。」
- お化け役他に、入口や出口での案内係、呼び込み係などが必要だという意見が出たので、前半と後半のそれぞれの係に分かれ、準備してお客を案内し始めた。お化け屋敷の中にお客とお化けを分ける段ボールを置いた。入口にも段ボールを置き、くぐって1人ずつ入るようにして、混乱することなくお化け屋敷は続いた。

【考察】

「伝える」…どうしたら解決できるか意見を出し合った。また、半数に分かれて係を分担することも、友達の話聞き、ルールを理解した上で、自分はどちらがよいか伝え合い、すぐに2つのグループに分かれることができた。

「受け入れる」…解決策が提案されたときに、そのルールを理解し受け入れることで、役割を分担することができた。

「共有する」…お化けが多すぎると自分たちで課題を感じ、集まっていた。話し合いの途中で話を最後まで聞けずに途中でやめていく子どもたちも数人いたが、10人以上は話し合いの最後まで残った。

困ったときに集まって話をするということが、少しずつできるようになっていると感じた。どうしたら遊びを進めていくことができるのかという、共通の問題意識をもち、その中で自分の考えを伝え、友達の話聞いて受け入れることで話し合いが進み、遊びの進め方を共有する。

5. 学級全体での話し合い活動

5.1 話し合い「チーム名はどうするか」(5歳児9月)

本園の運動会では、それぞれのクラスが2つのチームに分かれることにしている。チームのメンバーは教師が割り振り、それぞれのチームの年長児でチーム名を決めることにしている。例年、「かまきり」「ねこ」「いるか」など、子どもたちの好きなものの名前に決まっていた。この日、年長児全員を集め、今からチームに分かれてチーム名を決めることを伝えた。昨年度の「いるか」と「はなび」以外の名前にすること、みんなが知っている名前にすること、の2点を伝え、チーム毎に集まり、表5のように話し合った。

【考察】

「伝える」…どんな名前のチームがよいか、自分で考え、意見を言葉で伝えた。「3文字で」や「うさぎとくじらどっち」といった、ピンポイントの質問に対して、質問を理解した上で答えていた。

「受け入れる」…A児やB児が中心となり、話し合いを進めたが、他の子どもたちは二人の進め方を受け入れ、聞かれている質問や提案に沿った意見を出すことで話し合いを進めた。

「共有する」…運動会のチームの名前を決めるという目的をもって集まり、大きく脱線することなく話し合いを進めた。また、話し合いが進むにつれて選択肢が狭まっていったが、そうした話し合いの進捗状況も共有して進めていった。

教師は司会者というよりは、隣で話し合いを聞きながら、所々補足したり話し合いのポイントとなる部分を確認したりするようにした。そうすることで、子どもたちが自分たちで話し合いの進め方を身に付けていけると考える。

表5 話し合い「チーム名はどうするか」の実際

- 18人が輪になって座り、それぞれが次々に思いついた名前を口にした。
A児「じゃあ一人ずつ言っていこう。何がいい？」
- A児が一人ずつに尋ね始めた。「たいよう」「にじ」「うさぎ」などが出て来た。
教師「たくさん出て来たね。どうやって決めようか。」
B児「〇〇がいい人？って聞いたらいいいんじゃない？」
C児「やだー。」
D児「ねえ。3文字がいいんじゃない？」
教師「3文字っていうと？」
D児「3文字だと、フレーフレーのときに言いやすいと思うの。」
教師「なるほど。『フレーフレーいるか』みたいに3文字だと言いやすいね。たしかに、『フレープレートリケラトプス』じゃあ言いにくいもんね。」
B児「じゃあ、どれがいい？」
教師「今まで出たものから3文字を選ぶのか、もう1回3文字で聞いていくのか、どっちがいいかな。」
D児「もう1回聞く。」
A児「何がいい？」
- A児が再び全員に尋ね、複数意見が出て、くじらとうさぎの意見が少し多かった。
教師「くじらとうさぎが多かったね。このどちらかに決めていいのかな。」
B児「くじらとうさぎどっちがいい？」
- B児が一人ずつくじらとうさぎのどちらがよいか尋ね、くじらが多かった。
教師「みんなに聞いたらくじらのほうが多かったみたいだけど、うさぎって言った人は、くじらでもいいのかな。」
- うさぎと言った子どもたちもくじらで納得したため、くじらチームに決まった。

5.2 話し合い「リレーの順番はどうするか」(5歳児10月)

チームの名前を決め、それぞれがする運動会の係なども決めた。年長児はクラス全員でリレーをすることになっており、チームに分かれ、表6のように、走る順番を自分たちで話し合った。

【考察】

「伝える」…自分がどのくらいの順番で走りたいのか、言葉で伝えたり、その場所に並んで伝えたりすることができた。走るのが苦手な人という基準もあったが、速さに関係なく、自分の気持ちを伝えて並んでいた。

「受け入れる」…初め“足が遅い人”という表現であったが、教師の言葉を受け入れ、“走るのが苦手な人”という表現に替えた。話し合いの中心であるY児やZ児に足が遅い友達を見下すような雰囲気はなく、あくまで作戦という進め方だったからこそ、走るのが苦手だと感じている子どもも、その作戦を受け入れられたと考える。

「共有する」…どうしたら速くゴールすることができるか、という目標を共有していたからこそ、話し合いを進めることができ、何度も話し合うことができた。

教師は、自分たちで話し合う姿を見守り、気になった部分だけ言葉を掛けるようにした。そうすることで、自分たちで話し合ったという実感をもることができたと考える。

表6 話し合い「リレーの順番はどうするか」の実際

<p>【くじらチーム】</p> <p>A児「一番に走りたい人ー？」</p> <p>数人「はいはい！」</p> <p>A児「じゃあ集まってじゃんけんして。」</p> <p>○ 手を挙げた子どもたちが集まってじゃんけんをして決めた。</p> <p>B児「じゃあ、2番目がいい人集まってー？」</p> <p>○ A児とB児が中心となり、1番から順に希望を聞きながら、最後まで順番を決めた。くじらチームは、運動会当日まで決めた順番で走った。</p> <p>【きつねチーム】</p> <p>C児「どうするー？」</p> <p>D児「足が速い人が最初がいいんじゃない？」</p> <p>C児「いいね。」</p> <p>教師「決まりそう？」</p> <p>D児「最初に速い人にして、後から遅い人にするの。」</p> <p>教師「そっか。ただ足が遅いって言われちゃうと、ちょっと悲しいかな。」</p> <p>C児「違うよ。私が言うんじゃないで、自分で並ぶんだよ。」</p> <p>教師「うんうん。もちろん、『あなた遅い！』って言ってないのは知っているよ。ただ、聞いていて、ちょっと悲しいから、『走るの苦手な人』『走るの自信ある人』とかのほうがいいんじゃないかな。」</p> <p>D児「分かった。(みんなに向かって) 走るの自信あるよって人から並んで、走るの苦手な人は後ろに並んで。」</p> <p>○ C児の言葉を聞き、メンバーは自分が走りたいと思う順番のあたりに並び始め、順番を決めた。きつねチームは、練習の後何度か話し合いを行い、順番を入れ替えた。運動会当日は、きつねチームが勝利した。</p>
--

6. おわりに

今回、幼児期の子どもたちの話し合いの実際についてまとめた。幼児期の子どもたちは、ものの取り合いや遊びの進め方など、様々なことについて友達と話し合う場面に多く出会う。初めのうちは、子どもたちだけで話し合うことは難しいため、教師が代わりに伝えたり、司会者となったり、司会のサポートをしたりすることで、少しずつ話し合いの進め方を身に付けていくことができる。本報告では、話し合いを進めていく中で、自分の気持ちや考えを「伝える」こと、友達の気持ちや考えを「受け入れる」こと、話し合いのテーマを「共有する」こと、の3つの視点から事例をまとめた。幼児期の子どもたちにとって、自分が感じたことや考えたことを友達に伝え合ったり、友達の考えを受け入れたり受け入れてもらったりする経験を重ねることで、豊かな人間関係を育んでいくことへとつながっていくと考える。

【引用文献】

文部科学省「幼稚園教育要領解説」(平成30年 フレーベル館)